

## 書評

### 「世界一豊かなスイスとそっくりな国ニッポン」

川口マーン恵美著：講談社＋α新書

本書はドイツ在住の著者が書いた「住んでみたドイツ 8勝2敗で日本の勝ち」などのシリーズに続く比較文化論。生活者の視点から綴られる話には頷かされるものが多い。

2015年に国連が発表したワールド・ハピネス・レポートによると国民の幸福度が一番高いのはスイスだそうだ。幸福度の比較には、平均寿命、社会福祉の充実、人生の選択肢の広さ、汚職の頻度、1人当たりの国内総生産などが用いられているという。ちなみに日本は46位で、エルサルバドルよりも低い。こんなデータは本当だろうかと著者も疑問視しているが、スイスと日本には意外に共通点があるそうだ。日本の「おもてなし」の精神はスイスではホテル学校としてビジネスモデル化されているし、農業への多額の補助金は実は観光面で大いに役立っている例など大変参考になる。

スイスの国民投票は有名だが、エネルギー政策も原子力については二転三転していることが紹介されている。スイスの電力は6割が水力で、約4割が原子力だが、冬場は暖房のために電力消費が増えるが、川の水が減るため自前の電気だけでは不足する。そのためフランスから電気を大量に輸入しているが、2015年はスイスの五基の原子力発電所のうち二基が圧力容器の問題で停止した。この問題で、スイスの電力会社が年末に停電の可能性をほのめかすような発表をしたとたんに原発がなくなったらどうなるかという議論で大騒ぎになったそうだ。

ドイツの再生可能エネルギー政策の破綻は著者の目からは明らかだそうだが、その現実を参考にしない日本のエネルギー政策には大変疑問があると著者はいう。

ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の四つを公用語とし、多民族国家のスイスを束ねているのは危機感と国防意識という説がある。ヨーロッパの中で独立独歩を貫いているスイスと日本のおかれている立場には共通するものがある。エネルギー政策一つをとってもフラフラしている日本にはもっとしっかりしてほしいとのメッセージは多くの方に読んでもらいたい。

(シニアネットワーク会員 齋藤 隆)